埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Consideration concerning support activities for Minami Sanriku Town : division and disparity in the region

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-09-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小山, 望, 河合, 高鋭
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/336

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

研究論文

南三陸町への支援活動に関する考察

――分断と格差について――

Consideration concerning support activities for Minami Sanriku Town:
division and disparity in the region

小山　望[1]・河合　高鋭[2]
OYAMA Nozomi and KAWAI Takatoshi

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大地震は，巨大津波を励起して，千葉県から青森県に至る 6 県の沿岸域に甚大な被害をもたらした。津波の浸水地域 561 km^2 にも及び，建物全壊地域は 99 km^2 と壊滅的な打撃を受けた。関東大震災の焼失面積が 35 km^2，阪神淡路大震災の土地区画整理面積は 2.6 km^2 あったことを考えると東日本大震災の被災状況の甚大さは際立っている。この災害では数万人の尊い命が亡くなり，戦後最大の犠牲者をもたらした大震災となった。加えて福島第 1 原発の爆発事故で自宅を追われ，県外で避難生活を強いられている人は 4 万 6 千人である（平成 26 年 4 月福島県調べ）。この災害の 1 つの特徴は，その被害の多様性と多層性にある。被害の種類が多様であり，その程度もさまざまである。その多様性の結果としては被災地域では分断が起こっており，津波被災による分断，広域災害ゆえの分断，福島第 1 発電所原発事故による分断である（関谷 2012）。筆者は東日本大震災後，2012 年 3 月より，定期的に宮城県南三陸町を訪問し，地域住民の交流会，人間関係づくりの支援活動を行っているが，その地域でも分断や様々な格差が生じていることを経験している。本報告では被災地で起こっている分断や格差について事例を基に考察を試みたい。

1　埼玉学園大学大学院心理学研究科教授
2　和泉短期大学児童福祉学科講師

2. 南三陸町について

宮城県南三陸町は宮城県北東部，本吉郡の南端に位置している。東は太平洋に面し，三方を標高 300～500 m の山々に囲まれている。北は気仙沼市，南は石巻に隣接している（図 1）。平成 17 年に志津川町と歌津町が合併して南三陸町となった。震災による死者は 620 名，行方不明者 215 名（平成 26 年 9 月）で，計 835 名である。町の人口の約 5％にあたる方が亡くなってしまうという甚大な被害を受けている。震災前の南三陸町の人口（23 年 2 月）は 17,666 人である。平成 26 年 9 月時点の人口は 14,276 人で，震災前と比べて 3,300 人（約 20％）減少し，年々減少傾向になっている。

仮設住宅団地は 48 の地域に 58 か所あり，小規模の仮設団地で 10 戸，大規模の仮設団地では 250 戸で計 2,195 戸が建設されている（表 1）。南三陸町では平成 26 年 9 月での世帯数が 4,740 世

図 1　南三陸町

表１　南三陸町の仮設住宅数

地　区	数	戸数
志 津 川	22	648
入　　谷	7	161
戸　　倉	7	256
歌　　津	16	644
南　　方	2	351
横　　山	4	135
計	58	2,195

写真１　破壊された南三陸町

写真２　破壊された防災庁舎

写真３　殆ど破壊された南三陸町

帯あり，町の世帯の約半分は仮設住宅に住んでいることから被災の甚大さがわかる。

町の住宅は全壊が 3,143 戸で 58%，半壊が 178 戸で 3.3%，合わせて 61.3%が壊滅している。町の公共施設としては，役場，保育所，小学校，保健センター，公民館，図書館，公立病院，地方卸売市場など主要な施設が被害にあい，行政機能，医療機能，教育機能などあらゆる機能がストップする状態になってしまった（写真①②③）。

町の公共交通として JR 気仙沼線が運行され，南三陸町では，陸前戸倉，志津川，清水浜，歌津，陸前港の５つの駅に停車していたが，震災で町内の駅・線路ともすべて破壊されて不通になっている。現在は BRT（バス高速輸送システム）が運行されている。

町の産業としては，主として水産業と観光で，他に農業，製造業，小売りなどである。漁業は，ノリ，ワカメ，カキ，ホタテ，ホヤ，サケなどの養殖漁業が盛んである。3 年 8 か月たって仮設商店街が 2 か所できたものの，住宅の高台移転計画は進まず，町の復興のスピードはかなり遅れている。町内に大型のスーパーマーケットがないため買い物には石巻市，登米市，気仙沼市に車を利用して行く人も多く，住民にとっては生活に不便な状態が続いている。

3. 本報告の目的

筆者の所属する日本人間関係学会は，被災地での支援活動を目的として，学会内に支援活動委員会を 2011 年 8 月に立ち上げた。筆者の友人の案内で南三陸町を訪問したことがきっかけで，支援活動を行うことにしたのである。支援活動の目的は南三陸町志津川のある仮設住宅に住む被災者とその周辺の自宅に住む地域住民（被災者）との人間関係づくり，コミュニケーションづくりである。平成 26 年 8 月までに計 14 回ほど現地を訪れている。南三陸町の保健福祉課と連携しながら，仮設住宅での住民同士の人間関係づくりや地域のコミュニケーションづくりという視点から行っている。本報告では，南三陸町での支援活動の中心

的な場所としてA地区を選び，A地区で起こった分断と格差について考察を加え検討することを目的とする。

平成20年，A地区は人口283人，80世帯の漁港に面した小さな集落であった。主として漁業や水産加工業，農業の従事者，町役場，民間会社に勤める方々が住んでいる。しかし，平成24年には人口233人，74世帯に減少している。A地区にある仮設住宅には19世帯が入所している。

2011年から2014年の間の主な活動の経過と内容を表2に示す。

表2　支援活動の回数と内容

回数	年月日	活動人数	活　動　内　容
1	2011. 10/6～ 10/7	2	・訪問先…南三陸町保健福祉課 支援活動の事前調査の目的で町の保健福祉課を訪問して支援ニーズを探り，支援団体として何が提供できるか話し合う目的で挨拶に伺った。それに対して3月から9月にかけて関西や中国地方から大勢の民間団体，NPO団体のボランティア，保健士，臨床心理士，社会福祉士が派遣されてきたが，困惑することもあった。南三陸町では心のケアのニーズが少ないので，そうした支援活動はいらない。また仮設住宅への入居が始まると，支援活動は一気に引いていった。もし支援活動をするのであれば，提供できる支援活動のメニュー見せほしいという要望があった。
2	2011. 12/26	2	・訪問先…南三陸町保健福祉課 支援活動の事前調査の2回目として町の保健福祉課を訪問し，被災地で求められている支援ニーズについて話し合った。今後は支援の具体的なプログラムを密に連絡を取り合い，3月からの支援活動の準備に入った。3月までに支援活動先を紹介してもらうことになった。仮設住宅の住民（以降仮設住宅住民）の主な要望は，「春休み，夏休みなどにまとまった期間での活動」「普通の行事を普通にやりたい」「地域の人間関係づくりの支援」「被災者の自立を促すための支援」「支援の手が届きにくい小さな仮設住宅への支援」などであった。心のケアの支援活動のニーズはなく，保健福祉課のマンパワーが不足しているので，地域のコミュニティづくりの支援のサポートをして欲しい（保健福祉課）とのことであった。
3	2012. 3/26～ 3/29	15	・訪問先…D小学校仮設住宅，A地区仮設住宅，H地区仮設住宅，B地区仮設住宅の4箇所の仮設団地 ・春休み中の平日の活動である。会場は4か所ある仮設団地の集会所を借りた。 ・「作って遊ぼう＆レク活動」として，4か所の仮設住宅の子どもたちを対象に工作，実験，団子づくり，ボール遊びなどを実施した。 ・H地区の仮設住宅では集会所にカラオケセットを持ち込んでの「カラオケ大会」を実施したところ，空気が和み，手拍子やダンスなどで高齢者50名ほどが参加して楽しんだ。最大規模のH地区仮設住宅と比べると，小規模のA地区やN地区の仮設住宅では殆ど支援活動の手が差し伸べられず，支援の格差を感じた。 今回から支援活動には日本人間関係学会員と東京理科大学の大学院生・学生も加えた混成支援チームとなった。大学院生や学生には仮設住宅の子どもたちとの遊びや交流を担当してもらうことにした。
4	2012. 6/1～ 6/3	2	・訪問先…保健福祉課，A地区仮設住宅　第1回交流会 ・保健センターで3月の支援活動の報告及び今後の支援活動の方向性について打ち合わせ，A地区の仮設住宅を中心に行うこととした。 ・筆者による「心と体のリラクゼーション講座」をA地区仮設住宅集会所で開き，住民15名が参加した。 ・カフェ「お茶っこ飲むっぺ」を集会所で開き，16名が参加した。住民は津波の恐ろしさや犠牲になった親戚や友人の話を語った。狭くてプライバシーのない仮設住宅でのストレスも訴えていた。

5	2012. 8/31 ～ 9/2	10	・訪問先…A 地区仮設住宅　第２回交流会 ・子ども対象に体育館では駆けっこ，バドミントン，サッカーなど，集会所では工作，理科の実験を大学生が主になって行った。 ・カフェ「お茶っこ飲むっぺ」を集会所で開き，13 名が参加した。豚汁やおにぎりを準備し，住民同士のコミュニケーションづくりを図った。
6	2012 9/21	15	・被災地南三陸町応援ツアー開催 日本人間関係学会会員を対象に被災地の南三陸町を訪問して被災の状況を見て歩いた。また震災の語り部から津波に襲われた話を聴いた。仮設住宅住民から震災の様子やその後の生活についての話を聴いた。その後は，南三陸町の商店街で買い物をした。
7	2012. 12/1 ～ 12/2	7	・訪問先…A 地区仮設住宅　第３回交流会 ・働き盛りの方々中心の交流会を開催してほしいとの要望を受け，土曜夕方からゲームやカラオケを交えながら熟年層の 18 名が参加し交流を図った。 ・交流の場に参加した A 地区の自宅に住む住民（以降は自宅住民）からは，支援活動は仮設住宅住民だけではなく周辺の自宅住民にも声をかけて参加できるようにして欲しいという要望があり，今後の支援活動の課題ができた。
8	2013. 3/28 ～ 3/30	17	・訪問先…A 地区仮設住宅，お寺　第４回交流会 ・仮設住宅住民と自宅住民とのコミュニケーションづくりを図るため，これまで交流会場であった仮設住宅集会所から A 地区のお寺（T 寺）で交流会を開催した（写真 4）。歌やゲーム，マッサージなどで楽しみ，A 地区全体では 20 名が参加した。主として自宅住民が参加し，仮設住宅住民も数名参加した。 写真 4 ・子どもたちは体育館で大学生とドッジボールやバドミントン，サッカーをして汗を流した（写真 5）。 写真 5
9	2013. 6/22 ～ 6/23	8	・訪問先…A 地区仮設住宅，お寺　第５回交流会 ・T 寺で交流会を行った。リラクゼーションを得るための丹田呼吸法の実施やピアノに合わせて「千の風になって」を合唱，ジェスチャーゲームなどをして楽しんだ。

			・8 月は仮設住宅住民と自宅住民が一堂に会し，仮設住宅の駐車場で盆踊りや流しそうめんをやることが決まった。また盆踊りで着る浴衣を住民に寄付することにした。南三陸町の盆踊りの曲「トコヤッサイ」をかけて全員で練習した。
10	2013. 8/9 ～ 8/11	14	・訪問先…A 地区仮設住宅，お寺　第 6 回交流会 ・A 地区住民のコミュニケーションづくりを図るため盆踊りを開催した。浴衣を準備して住民に配付した。 ・A 地区の漁港でウニの水揚げ作業を手伝った。 ・体育館で子どもたちとボールを使って遊んだ。 ・夏祭りとして，流しそうめん，スイカ割り，水玉風船を用意した。盆踊りの後は，駐車場で A 地区の住民と飲食を共にして親睦を深めた。住民 40 名が参加し自宅住民も 8 名参加した。
11	2013. 10/19 ～ 10/20	14	・訪問先…A 地区仮設住宅，お寺，S 小学校　第 7 回交流会 ・お寺でハロウィンの衣装を着てビンゴ大会，会員の友人によるミニコンサート，会員ギター演奏，A 地区の子どもが 20 名参加した。 ・仮設住宅集会所で「お茶っこ飲むっぺ会」を開催した。 ・S 小学校を訪問し，仮設住宅の子供たちの学習発表会を見学した。 ・仮設住宅と A 地区の自宅を訪問し，住民の話を聴く支援活動を行った。
12	2014. 3/22 ～ 3/23	11	訪問先…A 地区仮設住宅集会所　第 8 回交流会 ・A 地区の持家を訪問して，話を聴く ・仮設住宅集会所で「お茶っこ飲むっぺ会」開催 ・体育館で子どもたちと体を動かす遊びを行う。ドッチボールやフットサルを行った。
13	2014. 6/21 ～ 6/22	11	訪問先…A 地区仮設住宅前　駐車場　第 9 回交流会 ・A 地区仮設住宅での交流会（バーベキューパーティ） 参加者は仮設住宅住民でだけではなく，周辺の自宅住民も参加し，手伝いや協力もあり大変盛り上がり和やかに終了した（写真 6）。参加者は大人 30 名，子ども 15 名，計 45 名。 仮設住宅の子どもだけなく，周辺に住んでいる子どもたちも参加して，大学生たちと遊んでいた。 写真 6 ・子育てサークル「もこもこ」における育児講座の開催 子育てサークルの依頼で育児講座を行った。参加者は 8 名。 「乳幼児の発達と心理」のついての講義をした後に子育て中の参加者から育児上の悩みや相談があった。 母親が講義を受けている間，子どもたちは支援活動チームメンバーに遊んでもらった。参加者からは，三世代同居での苦労話，嫁・姑関係をどうするか，ストレスをいかに解消するかという話題がでた。

14	2014. 8/8～ 8/10	12	訪問先…平成アリーナ研修室　第10回交流会 ・子育てサークル「もこもこ」における育児講座の開催。参加者は5名。 ・A地区の仮設住宅の住民と自宅住民との交流会実施。参加者　は大人25名，子ども10名，計35名。 当初は盆踊りであったが，台風が近づいているため中止になった。仮設住宅の駐車場で大学生がギター演奏して子どもたちと歌った。仮設住宅の集会所で飲食をともにしながら親睦交流会を行った。自宅住民も6人参加して和やかな雰囲気で行われた。子どもたちは花火をして楽しんだ。 ・平成の森アリーナ（体育館）にて，A地区の子どもたちとの交流会を実施した。参加者は子ども10名（中学生4名，小学生6名）。 活動には東京理科大学の学生と埼玉学園大学大学院の院生も参加した。

4. 南三陸町の風土と文化

南三陸町は，精神科や臨床心理士とのかかわりが少なく，個別に心理専門家に相談することに馴染みが薄い地域であり，「心のケア」という言葉での支援活動は，迷惑な存在として受けとめられてしまうことがあった。そのため一時は臨床心理士という身分を伏せて，避難所では一般ボランティア同様に支援物資の仕分けと運搬，清掃などの作業を通じて避難民との関係作りを行っていた。そうした中でやっと臨床心理士であることを名乗って歌津地区に平成の森の仮設住宅前に「カフェ・あづまーれ」を開設することができた（小俣 2013）。南三陸町は，心のケアの支援活動に入るのは難しいし，さまざまな団体（臨床心理系や医療や福祉系の団体，宗教の団体など）が無理矢理に訪れて，筋の通らないやり方にうんざりしている（長谷川・若島 2013）。支援活動家の言葉にあるように，震災以降日本中から数多くの臨床心理士の団体や支援活動グループが訪れて，地元では混乱したということもあったのであろう。筆者ら2011年の10月に保健福祉課を訪問して，支援活動についての話し合いをしているときにも，支援活動に対しては慎重な態度であった。「仮設住宅の人は心のケアを求めていないし，地元の住民も心のケアのニーズはない。PTSDも少ないし，心のケアは，宮城県の医療グループが行っているので必要ない。心のケアの活動であれば，お断りしたい」とはっきりと指摘された。南三陸町には，公立志津川病院があるが，精神科や心療内科はないし，民間の精神科クリニックも存在しない。そもそも南三陸町の住民には心のケアの活動に対する期待はなかった。精神科や心療内科は隣の気仙沼市や石巻市に行かないと診察は受けられない。この地域にはセラピー文化はなく，心のケアを受ける精神的な風土がないのである。三陸沿岸のなかでも南三陸町の人口17,666人は，石巻市の150,000人，気仙沼市の68,000人，登米市の84,000人と比べて少なく町の規模もかなり小さいことがわかる。漁業が盛んな町であるが，人口の移動も少なく，先祖代々から南三陸町に住み続けている町民が多く，地域コミュニティの絆も強い土地柄である。またこの地には家制度のなごりのような本家・分家の制度の伝統があり，家を建てる際にも本家の許しを得てから建てるという風習もあるようだ。高台に家を建てる土地も所有していない分家の場合は，「過去の津波で被災した土地であっても，漁港に近くて，利便性のある低地に家を建てるしかなかった」と，今回津波で家を流され仮設住宅に入居している住民から話を聞いた。

5. 分断と格差に関するエピソード（浸水域における分断）

津波，河川災害といった水災害・土砂災害の被災は「境界」が明確になることが1つの特徴になる。水や土砂が到達したところ，到達しなかったところ，すなわち「浸水域」によって被害があった場所と被害がなかった場所が明確に「分断」される。東日本大震災において地震動の揺れが建物を倒壊するほど大きくなかったことから，三陸沿岸地帯においてこの境界が明確なものになった（関谷 2012）。A地区のある志津川地区は全世帯70％が津波で家が損壊している。南三陸町でも壊滅的な被害を受けた地域である。A地区でも漁港に近くに建っていた約40軒の家が津波で損壊

し，犠牲者も数名でている。家を失った世帯のうち10数世帯はA地区の仮設住宅に移り，あとの世帯は他の仮設住宅に移っている。A地区においても仮設住宅住民と，元々周辺で自宅住民と浸水域による分断が起こっていた。仮設住宅はA地区の高台に建っているが，その道路を隔てて家があり，さらに坂を降りると下には集落の形で40数軒の家が集まっている。その家々は日常を取り戻している。一方，仮設住宅住民は時間がたつほどに，被災格差を感じて不公平感を持つに至っている。仮設住宅住民は，車で集落を通るたびに，日常生活が営まれている空間に自分がいることと家を喪失した感覚とのギャップに悲しみや不安が蘇ってくるのではないかと思われる。まして時間が経過しても住宅の高台移転が進まない状態ではなおこのと不安が募ってくると思われる。われわれの支援活動も当初は仮設住宅を中心に行っていたが，周辺の自宅住民から，下記のような不満がでた。

① 3回目の「交流会」でのエピソード

2012年12月の仮設住宅集会所で，住民の交流会を開いていた際に発せられた，A地区の自宅住民である70代男性参加者からの声である。

「支援活動が仮設住宅を中心に行われているのは，おかしい。交流会の案内もさっき届いたばかりだ」と怒ったように交流会の案内のチラシを持参しながら集会所に来られた。「俺たちも被災している。支援活動は仮設住宅だけではなく，A地区全体に声をかけて交流会を計画してほしい」という不満をぶつけてきた。しかし，参加者や支援者と飲食をともにしながら談笑するうちに，この男性は機嫌が良くなったのか踊り始め，会場の雰囲気を和ませてくれた。

私たちの支援活動がこれまで仮設住宅住民中心であったことを深く反省させられた出来事であった。自宅に住んでいる人の多くは仮設住宅に支援活動が集まっているという支援格差の不満を感じているのだという立場の発言であった。

② 3回目の「交流会」で住民が語ったエピソード

仮設住宅住民の声である。

・「漁業関係者（漁協組合員）だけ手厚い補償をもらっていいよな。瓦礫処理に行って，1日働けば1万2千円のお金がでる。夫婦で働けば2万4千円になる。20日働いたら48万だ。民間会社に勤務しているが，補償はない。不公平じゃないか」

・「漁協関係者は，いいよね。家族で瓦礫処理に行って，結構なお金がでる。私は畑をやっているけど補償金などはでないから生活は苦しい」

・交流会で住民が語ったエピソード

「ワカメの養殖はあまりもうからなかったが，ギンザケの養殖で大もうけした人がいるようだ」同じ漁師でも収入の点で，経済格差が生じている。

この3件のエピソードは同じ仮設住宅住民から聞いた話で，仮設住宅の中でも補償金をもらっている人，もらっていない人など生活上の経済支援の格差が生じていて，住民同士の分断になりかねない。

③ 4回目の「お寺での交流会」でのエピソード

3回目の交流会はA地区全体を対象に交流会を開いてくれという住民の要望から，仮設住宅の集会所ではなく，A地区にあるお寺を会場にして交流会を開くことになった。その際に取材に来た記者が書いたのがこの新聞記事である。

朝日新聞　2012年4月28日　伊藤喜之氏の記事

「上の人，下の人の溝」

南三陸町のある寺で開かれた住民たちの交流会である。元々は同じ集落に暮らし，仲の良かった住民20人が集まった。このうち7人は自宅を津波で全壊し，仮設住宅に移った。「上の人」「下の人」と呼び合っている，と参加した支援者が教えてくれた。高台の仮設住宅に移った人が「上の人」，低地部に家が残った人

が「下の人」だという。この交流会の狙いはこの隔たりを解消することだった。

１階まで浸水した自宅が残った60代の男性は，「支援物資でいろいろあったんだ」と事情を説明する。家が残っても身内を失い，失業した人も多い。震災直後は，家を失った人を自宅に避難させた。それなのに仮設住宅ばかりに支援物資が届く。同じ被災者じゃないかと不満を感じたと。だが仮設住宅暮らしの70代の男性の説明はまるで違う。「支援物資は上の人も下の人も平等だった。でもそれはおかしい。こっちは家を流されているんだ。」集落が分断されるとその「絆」ゆえに誤解や不信が広がる。会を催した小山望・東京理科大学教授（注1）は言う「心では誰もが修復を望んでいる。でも当事者だけでは難しい。間に入って支援を続けたい。」

この記事からも明らかなように，支援活動が仮設住宅に集中していることへの不満，支援格差を感じているのは自宅に住んでいる人である。

④　４回目の「お寺で交流会」でのエピソード２

・自宅に住む50代の女性の話。「震災直後は，自宅に残った少ない食べ物をみんなで分け合って食べていた。あんなに仲良かったのにね。仮設住宅ができて，地域が分断してしまった。支援活動はすべて仮設住宅に集まるし，支援物資も集まる。俺たちも被災して仕事や人も亡くなっているのにね。支援活動は仮設住宅が優遇されていると感じてしこりができたね。いろいろ言いたいことはあるけど，自宅を流されて仮設に住んでいる人には何も言えない」

・自宅に住む50代の女性の話「今でもあの防災庁舎の前を通るたびに涙がでてくる。あの庁舎で娘の夫が亡くなった。家を流された人のことを考えると悲しい，つらくなる，騒ぐ気分にはなれない」

上記のように仮設住宅住民と自宅住民との間は，分断されて互いに軋轢が生じている。自宅住民は，家を流された人のことを考えて言いたいことも我慢して抑えてしまう。あるひとつの小さな集落で浸水域による分断が生じている。

⑤　６回目の交流会　A地区の盆踊り参加者のエピソード

朝日新聞　10月6日　GLOBE G-6

伊藤喜之「被災地の分断を癒す　宮城県・盆踊り」の記事を下記に掲載

絆の大切さが叫ばれた東北の被災地では，時が経つとともに被災者同士の軋轢や人口流出が深刻になっている。そこで期待されるのが，祭りの癒しの力だ。8月10日夕，津波に襲われた宮城県北部のある集落。高台にある仮設住宅の広場で，お年寄りから小学生まで浴衣姿の20人ほどが輪になって炭坑節を踊っていた。屋台もちょうちんもない。参加者40人ほどの小さな盆踊り大会だ。仮設暮らしの行政区長（71）は酒で赤ら顔になって上機嫌だった。「俺らだけの力じゃ，もう祭りはできなかったんだ。先生たちのおかげだ」

「先生」とは，東京理科大学教授の小山望（61）のことだ。昨年3月から宮城県内の仮設で住民同士の交流を支援している日本人間関係学会の会長でもある。「参加してくれたのは集落の一振り。でも，好転するきっかけにはなるんです」自ら踊りの輪に加わった。

80世帯約300人が暮らしていたこの集落を東日本大震災で高さ約20ｍの津波が襲った。半分の約40世帯が家を流され，そのうち15世帯が高台につくられた仮設に移った。各地から届いた支援物資は被災の有無にかかわらず，集落内で平等に配ることに決めた。だが生活が復旧してくると，仮設暮らしの人から「家流されてんだ。平等はおかしい」と声が上がった。それに家が残った人たちは「こっちも同じ被災者。仮設に直接届く物資の方が多い筈」と勘ぐった。互いに不信感が募り，交流は減った。いつしか高台の仮設の人は「上の人」，低地に家が残った人は「下の人」と，呼び合うようになった。そんな事情を知った小山らが，関係修復のきっかけにと提案したのが祭りだった。集落には，歌や踊りを披露し合う恒例の祭りが3年に1度あったが，震災後はまだやったことがなかった。小山たちは，住民側になるべく祭りの準備を任せるようにした。例えば，みんなで

食べた流し素麺。竹を山から調達して組み立てたり，食材を用意したりするのを住民にしてもらった。祭りの当日。初めは気まずそうに互いに離れて座った上の人と下の人も酔いが手伝い交じり合った。「最近何してるっちゃ」と語り合い笑った。

⑥　9回目の「仮設住宅での交流会」の参加者たちのエピソード

8月に盆踊りをA地区で開催する企画を我々から両者の代表に持ちかけたときの反応である。

自宅住民の話：

「震災直後は流されなかった自宅に集まって，井戸の水で米を洗い，まきストーブでご飯を炊いたり，畑の野菜でおかずを作ったりして食べたよね。届いた支援物資もみんなで分けたね。でも仮設住宅ができたら，支援物資は仮設住宅に集まるけどこっちには回ってこないんだ。自分たちで独り占めするからね」

仮設住宅住民の話：

「何言ってんだ。こっちは家がないんだ。帰る家がないんだ。すべて失っているんだ。おめぇはその気持ちがわかるか」

そのとき，去年まで仮設住宅に住んでいて，今年の春にA地区に自宅を建て住んでいる30代の男性が言った。「家を亡くした気持ちはわかる，俺も家を流された。でも被災したのは，仮設住宅に住んでいる人だけない。家がある人もみんな被災者なんだ。いがみあってもしようがない。いっしょに盆踊り，夏祭りをしよう」その一言で，夏祭りは一緒にやることになった。

両者が相手に直接感情をぶつけて話すのを初めて聞いた。お互いに思っていても直接相手にぶつける機会もなかった。言いたいことが言えたことで，感情がすっきりしたのであろうか。盆踊り・夏祭りの準備は次回のA地区の会合で提案することが決まった。

自宅住民は仮設住宅住民が支援物資を独占して地区全体に分けないことや，仮設住宅中心に支援物資が届くなど支援活動が集中していることへの不満，支援格差を問題にしている。一方，仮設住宅住民は，家が流されてすべてを失ったことへの悔しさ・悲しみがある。同様に被災したといっても自宅住民は日常を取り戻しているのだと感じ，そのいらいらをぶつけてしまうのだろう。また高台移転が遅々としてあまり進んでいないことも背景にある。

しかし，言い合いをしつつも同じ漁協で働く漁師同士であるので，元々は親しい仲間であったことから，話が盆踊りになると，去年もやったし今年は一緒にやるかという雰囲気に変わっていった。盆踊りの場所は工場跡地と決まり，盆踊りの計画と内容については，地区の会合で提案することになった。担当は仮設住宅住民で書記のIさんとなった。Iさんには我々との連絡の窓口も担ってもらうことにした。

6. 分断されたA地区のコミュニケーション作りに向けた支援

1）A地区の子ども同士の交流の場の提供

遊びを通じて集落の子どもたち同士の結びつきや，コミュニティの再構築を考えて，仮設住宅やその周辺に住んでいる子どもたちを対象にイベント「大学生のお兄ちゃんと遊ぼう」を企画した。大学生と子どもたちが体育館で全身動かす運動（サッカー，ドッジボール，バスケットボール）を行い，チームプレーを通じて，子ども同士の結びつきを高める支援を行った。その結果，仮設住宅の子どもと自宅の子どもとは部落の分断とは関係なく一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。仮設住宅の子どもの親からは「家でゲームやインターネットばかりしている」という話があったが，外で子どもたちが遊ぶようになったと報告を受けて，体育館などでの遊びの支援が少しは役に立ったと思われる。以後支援活動の際には，小学生から中学生まで，A地区の子どもが20名ほど集まり，体育館やお寺での交流会に参加するようになった（小山2013）。支援活動に大学院生や学生が参加したことで，子どもたちとの人間関係づくりがスムーズになり，また，狭い仮設住宅では体を動かす機会がない子どもたちにとっては，体育館で思い切り体を動かすことはストレス発散になったと思われる。支援活動に日本人間関係学会員に加えて大学生が参加したことによりA地区の子どもたちの交流が進むと同時に，子どもが世

話になっているからと交流会に顔を出す大人が増えた。

仮設住宅の子どもや自宅の子どもはそれぞれの親の気持ちを察して，互いに交流するのを控えていたが，大学生が子どもたちと遊ぶようになり，すぐに垣根はとれて一緒に遊ぶようになった。子どもたちが媒体となって住民同士の交流に役立つことになり，大学生の参加は支援活動の幅に広がりを与えてくれた。仮設住宅住民と自宅住民のコミュニケーションづくりのきっかけはまず両者の子どもたちの交流から始まったと言ってもいいのである。

2）　仮設住宅の住民同士の交流の場を提供

2 回目の支援活動は仮設住宅の集会所で，「ストレス解消とリラクゼーション［講座」を開催して，主として仮設住宅住民に参加してもらった。参加者は，仮設住宅暮らしのストレス（狭い，隣の部屋の音が気になる，買い物が不便，プライバシーがない）を口々に訴えていた。隣の夫婦喧嘩の声やいびきまで聞こえるなどと笑いながら話していた。仮設住宅住民は 15 名が参加した。翌日は「お茶っこ飲むっぺ」を集会所で開き，16 名が参加した。参加者の多くは，震災時の体験やその後の苦労話（津波の恐ろしさ，避難所暮らし，仮設住宅での暮らし）を語った。普段は顔を見ても挨拶程度しか交わさず，集会所で集まってお茶を飲んだりすることは滅多にないので，このような機会ができてありがたいと話していた。

3）　A 地区の住民同士のコミュニケーションづくりを無理なく進める

A 地区の住民同士の軋轢をなるべく減らすために，仮設住宅住民が参加しやすい集会所と，自宅住民が参加しやすい場所であるお寺の両方を交流会の場所として設けた。双方の住民はどちらに顔を出してもいいように工夫した。しかし，仮設住宅の集会所で交流会を開くと自宅住民は遠慮して参加しなかった。またその反対にお寺で交流会を開くと仮設住宅住民はあまり参加しないことがわかった。どちらかの場所で交流会を開くと参加しない人がでてくるという問題が起こった。

5 回目のお寺での交流会の際に，A 地区の住民の交流イベントとして盆踊りの企画を提案したところ，盆踊りと流しそうめんを仮設住宅の駐車場で行うことが両者の合意できまり，双方で準備をすることになった。一歩前進である。盆踊りで着る浴衣 93 枚を住民に寄付をした。流しそうめんに使う竹を竹林から切り出してきて，そうめんがスムーズに流れように竹の中の節を削って高さを調節し，そうめん台を作ってもらった。そうめんを食べる人が 1 か所に集中して食べづらくないようにそうめん台は 2 台作ってもらった。盆踊り用の音響装置，照明なども共同で設置した。また夏祭りの雰囲気をだすために，子供たちは大学生と一緒に会場周りの飾りつけを行った。仮設住宅住民と自宅住民は互いに飲み物や食べ物を用意して，盆踊りのあとは飲食を共にしながら交流する場となった。会場が仮設住宅の駐車場ということもあり，参加した 40 名の殆どは仮設住宅住民であり，自宅住民は 8 名と少なかったのが課題として残ったが，初めて両者が合同して行事を行ったことは意義があると思われる。

4）　A 地区で夏に再度盆踊りをすることを提案

仮設住宅住民と自宅住民と話し合い，一時は両者でいがみあいになったが，工場跡地で盆踊りを行うことが決まった。A 地区の会合で正式に夏祭りをやることを提案することになった。共に何かを行うということはかなりの前進である。前回は仮設住宅の駐車場ということで，自宅住民の参加が少なかったので，両者の中間的な場所として工場跡地を会場に選んだ。あいにく当日は台風接近のおり，悪天のため盆踊りは中止となったが，仮設住宅の集会所で，仮設住宅住民と自宅住民が飲食を共にする親睦交流の場を持つことができた。高台移転計画の進捗状況を尋ねたところ，高台の土地の契約は終わり，土地の造成中ということであった。造成が終わると上下水道や電気などライフラインの工事が始まり，建物は来年夏に着工という予定だと話してくれた。しかし，オリンピックの誘致が東京に決まったことで，建築業者が東京方面に集中し，建築業者が不足して住宅建築が遅れることを心配していると語っていた。仮設住宅住民が高台に移転して自宅で落ち着いたころを目安に支援活動を終わろうと考えていると話したところ，是非，高台に移転後も訪問してくれと依頼された。

7. 考　　察

A 地区の住民の間に生じている分断や軋轢は，この地域に限られたことではなく，被災地の住民同士でもよくみられることである。村上（2014）は岩手県のある町の住民同士の軋轢を紹介している。「仮設住宅住民からすれば，半壊でも建て直せた住民は羨ましい気持ちはある。一方，家屋を立て直した住民もなけなしの金を使い，借金までしているのだから自分たちも被災者であり恵まれている意識はない。外部からの被災者支援は仮設住宅に偏りがちである，住民同士の関係に隙間風が吹くわけだ」

被災地で起こっている住民の間での分断は，上記に挙げたエピソードから被災者という同じ状態にありながらも，被災格差（全壊か，半壊か），支援格差（頻繁に支援物資が届けられる，たまにしか支援物資が届けられない，支援活動が受けられる，殆ど受けられない），経済格差（補償金がでる，でない）など様々な格差によってもたらされている。

こうした状況の中で，どのような支援が有効であるかを検討してみる。

1）継続的な支援

金（2010）は災害の支援活動は，1 週間でいなくなる者より，1 年，2 年と地元で関わっていく人間のほうがどれだけ住民の助けになるかわからないと述べているが，支援活動が一過性のものであれば，住民にとってはあまり意味のないものである。我々も支援活動を始めるにあたり，町の保健福祉課で打ち合わせたときに，町内 58 か所の仮設住宅を定期的に支援活動するにはかなりマンパワーが不足しているので，行き届いていない仮設住宅の支援活動を継続的に行ってほしいと依頼を受けた。震災のあった年の 3 月から 9 月にかけては多くの支援団体が南三陸町に押し寄せてきて支援を受ける町の行政機能が混乱するほどだったが，9 月になり被災者が仮設住宅に移ると，これらの団体もさっと引いてしまった。我々の支援活動は 3 回目の訪問時に 4 か所の仮設住宅を対象に支援活動を行った。大きな仮設住宅の団地，中規模の団地，小規模の団地の 3 タイプの支援先 4 か所を回り，そのなかで最も支援活動が行き届いていない A 地区の仮設住宅を継続的に支援することにした。この決定は間違っていなかったと思われる。大きな団地は絶えず支援を受けており，日本臨床心理士会が支援していた「カフェあづまーれ」が設置され，住民にとって安心できる場があった。また中規模の団地にもさまざまな支援団体が活動に入っていた。小規模の団地のうち最も支援活動が届いていない A 地区の仮設住宅団地を選び，仮設住宅の代表（区長）と話合って，どのような支援活動を望んでいるかなどを聴きながら，それに応えるような活動を実施して継続的に訪問することを伝えた。そして我々の支援活動が継続している要因として，A 地区の仮設住宅住民と自宅住民が我々を受け入れてくれたこと，我々との人間関係ができたことだと思われる。

我々は心のケアを支援活動の目的とせず，「普通の行事をやりたい」，「地域の人間関係づくりをしてもらいたい」などの住民の支援ニーズに耳を傾け応えようとしてきた。分断した地域のコミュニティは簡単には再形成できない。仮設住宅住民の高台移転が終了するなどある程度の時間が必要である。そうした意味では今後も継続して A 地区を見守り続けていきたいと考えている。

2）分断や格差のなかでできる支援とは

震災の傷跡はまだまだ癒えない状況のなかで，仮設住宅住民は 4 年目の冬を迎えている。東北の冬は厳しく，安直な作りの仮設住宅はかなり冷えると住民は話していた。高台移転の計画が進んで，やっと土地の造成までたどり着いた状態である。来年の住宅建設が予定通り進むかどうかの見通しは立っていない。

仮設住宅住民は家を流され，車も財産もすべてを失った人たちである。その喪失感は推し量ることはできない。一方，自宅住民も家こそ流されなかったものの半壊したり浸水したりと，家の修復にはかなりの借金を背負っている。もちろん車も流され，仕事も失っているし，家族を亡くした人もいる。この悲しみも癒えることはない。われわれにできることは，どちらの意見や話にも耳を傾け聴くことしかできない。住民の気持ちに寄り添うことを支援としてきている。

交流会の場で「俺たちは帰る家がないんだ」と言い放った仮設住宅の男性がいた。黙って頷きな

がら聴いていたら，「でも自然が相手だから，腹を立てても仕方ないべ」と言う人もいた。「助かってよかったよ。命あるだけましだよ」と言う女性もいた。自宅住民の男性は「仮設は支援物資を独り占めしている。被災は俺たちもおんなじだ」と言っていた。それぞれの声や気持ちに寄り添いながら，「そうですね」と共感した。交流会はそれぞれ言いたいことを吐露する場となった。普段はお互いに批判したり悪く言ったりすることもないが，押し込めてきた感情を解放しつつあった。そのことで一時的には険悪になっても，「帆立はどうだ」「母ちゃん元気か」などその後笑い声がでてくるようになった。普段は和を尊ぶ漁師仲間でもあるので，分断があってもそれを口に出して表現することはないと思われる。しかし，交流の場で，互いに言いたいことを言うことで，敢えて乗り越えようとしている気持ちが感じられる。当事者同士では話し合うことは難しくても，我々のような第三者が介入することでこの問題と向き合うことができるのであれば，A 地区の住民のコミュニケーションづくりに向けて進む一歩である。その意義を考え，今後もささやかながら支援活動を続けていきたいと思っている。

8. 今後の課題

分断と格差のある A 地域の住民のコミュニケーションづくりは，端緒についたばかりでまだ道半ばである。住民全体のコミュニケーションづくりまでは到達していない。交流会の参加人数もまだ少ない。来年（2015 年）の夏には A 地区全体で住民が参加できる盆踊り，夏祭りができるとように今から支援活動を準備していきたい。

9. おわりに

本論文を執筆するにあたり，A 地区の住民の皆様，とくに区長の S さん，お寺の住職の T さんには支援活動の際にいつもお世話になり，深く感謝申し上げたい。

また日本人間関係学会会員の川村幸夫さん，武井明美さん，松田峻さん，田嶋靖弘さん，元木直弘さん，小峯久子さん，川瀬洋子さん，田中典子さん，伊藤浩志さん，関谷不二夫さん，東京理科大学ボランティアサークル「ココサポ」の皆さん，埼玉学園大学大学院生の加藤冴子さん，小林桃子さんにも協力いただき感謝申し上げる次第である。

注１　筆者の前職場は東京理科大学

文　献

赤塚雄三　巨大津波から学ぶ　鹿島出版会　2013

長谷川啓三・若島孔文　震災心理社会ガイドブック　金子書房　2013

東日本大震災心理支援センター　南三陸町心理支援活動報告　2012

伊藤浩志・河合高鋭・田中典子・小山望　日本人間関係学会による南三陸町支援活動　日本人間関係学会第 21 回大会発表論文集 p. 21-22, 2013

伊藤喜之　上の人，下の人の溝　朝日新聞　4 月 28 日　2013

伊藤喜之　被災地の分断を癒やす　朝日新聞　GLOBE　10 月 6 日　2013

川島秀一　津波のまちに生きて　富山房インターナショナル　2012

松田峻・元木直弘・小山望　南三陸町におけるボランティア活動　日本人間関係学第 20 回大会発表論文集 p. 12, 2012

村上和巳　集団移転による自宅再建が進まない ── 地元住民に不公平感を生み出す復興計画　渋井哲也・村上和巳編　震災以降　三一書房　2014

小俣和義　被災地宮城県における心理支援活動　青山学院大学教育人間科学部紀要，4 号，pp. 71-82, 2013

小山望・伊藤稔・川村幸夫　大会企画シンポジウム「震災に求められる人間関係力 ── 宮城県南三陸町への支援活動 ──」（企画者・指定討論者）日本人間関係学会第 19 回大会発表論文集 p. 4, 2011

小山望　大会企画シンポジウム　南三陸町への復興支援活動 ── 今後の連携を求めて ──（企画者・シンポジスト）日本人間関係学会第 20 回大会発表論文集 p. 10, 2012

小山望　南三陸町の仮設住宅における支援活動 ── 人間関係づくりの視点から ── 日本カウンセリング学会　認定カウンセラー研修会，早稲田大学，2012 年 12 月

小山望　論点　溝埋める交流の場を提供　読売新聞　5 月 8 日　2013

小山望・川村幸夫・川合高鋭　南三陸町への支援活動について ── 支援活動が開始されるまでの経過 ──　日本人間関係学会第 21 回大会発表論文集 pp. 25-26, 2013

小山望・川村幸夫・早坂三郎・伊藤高昭　第 21 回大会企画シンポジウム　人間関係，古くて新しいテーマ ── 被災地の支援活動から学ぶ人間関係 ── 日本人間関係学会第 21 回発表論文集 p. 9, 2013

小山望・河合高鋭他　南三陸町支援活動に関する報告　日本人間関係学会広報誌「こころの広場」1 号，

pp. 1-3, 2013
小山望　時代の求める人間関係力　人間関係学研究 19 巻，p. 1, 2014
金吉晴　災害支援の心構え　日本心理臨床学会編　危機への心理支援学　遠見書房　2010
関谷直也　分断と格差の心理学　藤森立男・矢守克也編　復興と支援の災害心理学　福村出版　2012
菅原誠　災害列島に生きる ── ストレス障害と心のケア ──　平凡社　2011
富永良喜　災害・事件後の子どもの心理支援　創元社　2014